

石川県立看護大学附属地域ケア総合センター

事業報告書

第17巻

令和元年度

石川県立看護大学附属地域ケア総合センター

巻 頭 言

令和元年度(旧平成31年度)は、入試改革に対する判断を国から迫られた年でした。センター入試に記述式問題を取り入れる、英語試験に外部試験を活用して4技能をテストするなどが主な内容でした。背景には小学校から高等学校に至る知識偏重教育の行き過ぎの結果、状況に応じて考える力や多様性を理解する力等が育たないのではないかという国の懸念がありました。

一方、本学では、開学時から大学を地域に開く拠点としてこの地域ケア総合センターを設け、教員の活動ばかりでなく学生もこのセンターの様々な事業で学ぶことを推進してきました。学生は地域の方々の協力により新鮮な経験に出会い、多様な価値観が存在することや相互に違いをどのように受け入れともに暮らしているか等について学ぶことができていると思います。これは、学生を優れた看護職の卵として輩出するには、人間性の涵養がとても大切であると考えてのことであり、国の現在の方向性にも沿うものであると考えています。地域の皆様には学生を暖かく迎えていただき大変感謝しております。

さて、本学は開学20周年を迎え、地域との付き合いも長くなりました。かほく市との包括連携協定も10周年を迎え、年々内容が拡充されています。また奥能登地域に最も近い大学であるという立ち位置を活かし、今年度は奥能登地域での事業も増やしました。開学時から継続している事業に近年の新しい事業が加わり、本センターの存在意義はますます大きくなっています。

さらに今年度はセンターの国際貢献事業が飛躍した年でした。北陸 JICA と本センターが連携して10年以上継続してきた南米パラグアイの日系社会からの研修生に対する高齢化対策支援事業が、日本からパラグアイに出かけて現地で直接支援する“草の根活動(3年間)”に発展しました。また、同じく北陸 JICA と連携した東南アジア・コーカサス地方の国々の青年に対する母子保健等の研修事業が、現地に出向くフォローアップ事業に発展しました。今年度はカンボジアに行く予定でしたが、新型コロナウイルス感染の拡大のため次年度に延期になっています。草の根活動の実現も同様の心配があることはとても残念です。

令和元年度(旧平成31年度)のこのセンターの活動の詳細については、この報告書に記録されておりますのでどうぞご覧ください。

皆様からセンターの活動に対する要望や忌憚のないご意見をぜひお寄せいただきたいと存じます。

石川県公立大学法人 石川県立看護大学
学長 石垣和子

地域ケア総合センター「事業報告書（第17巻）」発刊に寄せて

地域ケア総合センターのさまざまな事業に日頃からご協力いただきありがとうございます。

この度、石川県立看護大学附属地域ケア総合センターの事業報告書（第17巻）を発刊する運びになりました。地域の皆さまにはご一読いただき忌憚のないご意見やご要望をいただければと思います。

2019年度の石川県立看護大学附属地域ケア総合センター事業では、人材育成事業として6事業、地域連携・貢献事業として11事業、国際貢献事業としては2事業を開催しました。

人材育成事業の「地域みんなで取り組む在宅療養移行支援」では2つの病院での事例検討会を行いました。ここ3年間継続して奥能登の看護職者の方々と一緒に在宅療養移行について学んできた成果が、看護実践としての実りを感じさせてくれました。また新任保健師卒後スキルアップ研修会には就業1年未満の15名の保健師の方々に参加をいただきました。乳児訪問や乳幼児健診の問診のデモンストレーションや講義を通して、現場ですぐに役立てられるような母子保健指導の実際を学ぶとともに、各市町の母子保健事業についての情報交換を行ったり、成人保健指導の実際や高齢者支援事業についても理解を深めることができました。また、先輩保健師の活動紹介を通して、今後の保健師活動を考える良い機会となりました。

地域連携・貢献事業ではかほく市いきいきステーションと協力して看護大学教員の知見を地域住民に還元する取組として、新たに地域公開講座を開催しました。毎回多くの方々にご参加していただきありがとうございます。少しでも看護大学を身近なものとして感じていただけたら嬉しい次第です。

また国際貢献事業のJICA日系研修としてパラグアイから2名の研修生を、JICA青年研修としてはカンボジアから研修生11名を受け入れました。また長年継続して行ってきたJICA日系研修の延長としてJICA草の根技術協力事業「日系社会における高齢者の介護予防支援プロジェクト」が採択されました。

これ以外にもさまざまな事業を開催し、多くの皆さまに足を運んでいただけたことを本当にうれしく思います。各事業の詳細については各報告をご覧くださいと思います。

地域ケア総合センターではより多くの大学教員が臨床現場や関係機関、自治体のニーズに応えることができるように、研究テーマとのマッチングを進めていきたいと考えています。

今後とも地域ケア総合センターの各事業にご理解とご協力をお願い申し上げます。

地域ケア総合センター長 牧野 智恵

目 次

(ページ)

1	人材育成事業	
1-1	専門職研修	
1-1-1	地域みんなで取り組む在宅療養移行支援	1
1-2	本学教員主催の研究会・事例検討会	
1-2-1	ジェネラリストのための事例検討会	3
1-2-2	ペリネイタル・グリーフケア検討会	4
1-2-3	子どもと家族への支援に関する勉強会（子育て・親子関係・虐待予防）	6
1-2-4	地域包括ケア時代に活躍する看護職	7
1-2-5	新任保健師スキルアップ研修会	8
1-3	相談サービス事業	
1-3-1	各種研修会等への講師派遣事業	9
1-3-2	病院への事例・活動・研究等の指導助言実施状況（再掲）	12
2	地域連携・貢献事業	
2-1	地域連携事業	
2-1-1	来入喜人（きときと）健康づくり支援事業	13
2-1-2	「ワクワク健康サークル」活動	14
2-1-3	棚田が織りなす食・緑・健康の郷づくり	15
2-1-4	モールウォーキング事業	16
2-1-5	災害につよい街づくり事業	17
2-1-6	農福連携いしかわ型ヒツジ飼育体験教室	19
2-2	生涯学習講座	
2-2-1	子育て中の母親たちのための「どろっふ・いん・さろん」	21
2-2-2	あかちゃんをお空にみ送られた方の自助グループに対するサポート活動	23
2-2-3	ヘッドマウントディスプレイを使用した「認知症疑似体験教室」	25
2-2-4	地域公開講座	27
2-2-5	若手看護師へのグリーフケア ～終末期看護・看取りの体験・悩みを共に語り心をリフレッシュ	29
2-3	ワンストップサービス事業	30
3	国際貢献事業	
3-1	JICA 日系研修「高齢者福祉におけるケアシステムと人材育成」コース	31
3-2	JICA 青年研修「地域保健医療実施管理」コース	34
4	その他	
4-1	かほく市との包括的連携協定に関わる取り組み	40

1 人材育成事業

1-1 専門職研修

1-1-1 地域みんなで取り組む在宅療養移行支援

企画担当：石川 倫子 / 基礎看護学講座 准教授

1. 事業の目的

能登北部の医療施設の方々が抱える在宅療養移行支援の課題を地域みんなでどのように取り組んでいくか、事例を通して具体的に考える。

2. 実施状況

<事例検討会>

日 時：令和元年6月15日（土） 10:00～15:00

場 所：キャッスル真名井（穴水）

講 師：在宅ケア移行支援研究所 宇都宮宏子先生

総合司会：石川倫子（石川県立看護大学 基礎看護学講座 准教授）

内 容：

第1部 10:00～12:00 病院から在宅(地域)へとつなぐ病院職員と在宅支援者との連携に関する事例検討
事例提供：珠洲市総合病院

第2部 13:00～15:00 終末期患者に対する意思決定支援に関する事例検討
事例提供：公立宇出津総合病院

参加者：84名

<在宅療養移行支援実施状況調査>

4つの病院の病棟看護師202名（全数）に無記名自記式質問紙調査を8月に実施した。

3. 実施内容

事例検討の第1部では、珠洲市総合病院が昨年の本事業が後押しとなって入退院支援センターを開設した。退院支援看護師が病棟と連携し、退院時はもちろん、入院時からケアマネジャーとの連携をするなど、高齢者が安心して在宅療養移行ができるよう地域みんなで支援を行っていた。この連携が他病院の看護師や介護職にやる気を喚起した。第2部は公立宇出津総合病院が、患者さんの「家に帰りたい、お願い帰らせて」という意思に看護師が必死に叶えられよう短期間で支援した事例を提供した。老々介護での看取りを実現したこの事例に、「この町で生ききるをかなえる」という本事業のねらいに大きく近づいた。

4つの病院における病棟看護師の在宅療養移行支援の実施状況調査結果は71項目中42項目が80%以上の実施率であった。特に「在宅死、在宅での見取りの意思確認」が75%以上であり、他文献と比較しても50%以上高かった。また連携に関する「入院時のケアマネジャーからの情報把握」も80%以上が実施していた。しかし、「ケアマネジャーや在宅医、訪問看護師と支援計画を立案する」(50.7%)や「ディケアサポート体制を患者・家族とともに検討する」(59.6%)など患者・家族や地域の方々と連携する項目は低かった。

4. 評価と今後の課題

在宅療養移行支援実施状況調査より、今回の検討会でケアマネジャーとの連携や在宅死、在宅での見取りの意思確認の実施率が高く、研修効果はあったと考えられる。しかし、在宅療養計画を患者・家族、地域の医療職・介護職と連携していくことには課題がある。地域の医療・介護・行政職、患者・家族みんなで、この街で暮らすためにどのような連携体制をとればよいのか考えて

いく必要がある。次年度は地域の看護職や介護職との連携に焦点を当てた事例検討会を行う。そして事例検討会を実践に活かす取り組み（能登北部の入退院支援ルールづくり作成）につなげていきたい。引き続き、能登北部の4病院の看護部長と話し合いながら研修を企画・運営していく。



1-2 本学教員主催の研究会・事例検討会

1-2-1 ジェネラリストのための事例検討

企画担当：中田 弘子 / 基礎看護学 教授

1. 事業の目的

急性期から長期療養介護等において、患者の早期の在宅復帰と地域での暮らしの継続を目指し、専門領域を超えたジェネラル・ナースの看護実践力の向上を支援する。

2. 実施状況

第1回事例検討

日時：令和元年8月24日（日）13時30分～16時00分

講師：中田 弘子（石川県立看護大学）他

場所：石川県立看護大学 地域ケア研修センター

参加者：33名（事例提供数：3事例）

第2回事例検討

日時：令和元年12月1日（土）13時30分～16時00分

講師：川島 和代（石川県立看護大学）他

場所：石川県立看護大学 大会議室

参加者：38名（事例提供数：1事例）

3. 評価と今後の課題

2回的事例検討の参加者総数は71名であった。事例提供者へは、事前の資料の教材化の段階からサポートを行った。アンケート結果では、研修への満足度は「満足」が9割、「やや満足」は1割であった。事例検討が今後の看護実践や教育への活用では、「活かせる」が9割であり、概ね好評であった。参加動機は、「職場の同僚等に勧められて」が最も多く、次いで「実践力の向上のため」であった。今後の研究会の参加希望では、「参加したい」が9割であった。自由回答では、「対応困難な事例の問題の整理とアプローチ方法が再確認できた」、「多重課題を抱える対象が退院後にセルフコントロールできる解決策の考え方を学べた」、「認知症ではBPSDに振り回されることがあるが、その人を見つめる視点と大切さを再認識できた」等がみられた。今後も地域の看護職の実践能力向上をも目指し、本活動を継続する予定である。

1-2-2 ペリネイタル・グリーフケア検討会

企画担当：米田 昌代 / 母性看護学 准教授

1. 事業の目的

グリーフケアの実践を学び、地域連携の構築をはかることによって、ペリネイタル・グリーフケアの充実をはかる。

2. 実施状況

第21回 日時:令和1年7月21日(日)13:30~16:00 場所:石川県立中央病院 会議室

テーマ 「宮崎県における天使ママの自助グループ活動の紹介

～地域・医療者とのつながりの中で～

講師 宮崎天使ママの会代表 黒木啓子氏

スケジュール 前半(60分) 講演

後半(22分) 交流タイム 体験者グループと医療者グループに分かれて

(黒木氏は体験者グループに入る)

(22分) 体験者・医療者合体グループ

発表&質疑応答(30分)

参加者 38名

第22回 日時:令和1年11月9日(土)10:00~12:00 場所:石川県立中央病院 会議室

テーマ 「県外のグリーフケアに取り組む人々と交流しよう!

話題提供 大阪市立母子医療センター 助産師 大蔵珠己氏、新潟大学医歯学総合病院グリーフケア外来 森山幸枝氏、藤田沙緒里氏(認定遺伝カウンセラー)、大阪大学人間科学研究科 人間科学専攻 講師 臨床心理士 管生聖子氏、石川グリーフケアの会代表 菅朱弥氏、今回の東アジアグリーフの集い・星の会代表 武田康男氏、東アジアグリーフの集い本部スタッフ・たんぽぽの会代表 山下恵子氏

前半、話題提供後、後半はフリーディスカッション

参加者 27名

コラボ企画 第13回東アジアグリーフの集い in 金沢 実行委員長 米田昌代

テーマ「周産期からのグリーフケア」

11月9日(土) 13:00~16:30 公開ミーティング 石川県立中央病院3階 会議室2

18:00~ 11月10日(日)午前 宿泊ミーティング

3. 実施内容

第21回

始めに黒木氏ご自身の赤ちゃんとの死別体験の中で、病院で赤ちゃんを「モノ」として扱われたという思いや忘れられない医療者からの言葉かけについての話をしてくださった。その体験を機に、先進地から10年遅れていた宮崎での対応を改善したいと宮崎天使ママ会を立ち上げられ、その活動内容(お話会、セミナー開催、個別相談、赤ちゃんの大きさにあった籠の棺・天使のゆりかごの作成・提供)についての具体的紹介と活動における課題についてもふれていただいた。宮崎県での産婦人科でのグリーフケアの確立を目標に地域・医療者と連携し、精力的に活動しておられる様子が伝わる講演内容だった。講演後は2回、グループ交流の時間をもうけ、最後に黒木氏と全体との交流として、グループで話し合われたことを発表しつつ、質疑応答していただいた。

第22回

午前中のケア検討会は午後からの集いの参加者に集結していただき、活動の紹介と活動に対す

る思いを語っていただき、そのあと、フリーで北陸の医療者と交流していただいた。

午後の第13回東アジアグリーフの集いは7名のお子さんを亡くされた方からのいのちのメッセージを生演奏にのせてお送りした後、わたしの思いと題し、双子のお子さんをみ送った杉村和葉さん、支援者の立場でのグリーフをNICU看護師の工藤淳子さん、いろいろなグリーフを体験された菅朱弥さんの3名に今の思いを語っていただいた。その後、分かち合うときとして、各グループに分かれ、自身のグリーフについて語っていたたく時間をもうけた。その後、語りつくせない方は宿泊ミーティングに参加された。

4. 評価と今後の課題

今年度の企画も医療者・貴重な体験者の話両方を聴きつつ、体験者との交流、施設間の交流にもつながるように企画した。今年度は第13回東アジアグリーフの集いが11月に金沢で開催され、グリーフケア検討会とコラボ企画としたことで、多くのグリーフケアに関わる人々と交流できたことは有意義であった。

第21回では参加者の満足度も高く、自助グループ同士の交流では、「今後の活動のイメージが ついた」、医療者からは「具体的なお話が聞け、今まで全く接点のなかった自助グループの方のお話が聞けてとても勉強になった」「違う地方のグリーフケアについて話を聞くことができよかった」「自助グループの方々の大変さを知り、病院・行政・自助グループの連携の大切さを知ることができた」「医療者として関わる中で、知らず知らずのうちに傷つけてしまっている可能性もあることを知り、自分の関わりを見直す機会となった」という感想がみられ、とても有意義なものになっていた。

第22回では普段から精力的にグリーフケアに取り組んでいる支援者からの熱い話を聴くことができる貴重な体験となっていた。時間が短かったため、あまり十分な情報交換はできなかったと思われるが、今後につなげることはできたと考える。東アジアグリーフの集いは学ぶ場ではなく、感じる場として、ゆったりとした時間の中、それぞれの方が自分自身のグリーフについて見つめる機会になったのではないかと思う。例年であると2月であったが、今年度は新型コロナウイルスでの活動自粛もあったため、時期的にもコラボ企画としてもよかったと考える。



1-2-3 子どもと家族への支援に関する勉強会（子育て・親子関係・虐待予防）

企画担当：西村真実子 / 小児看護学 教授

1. 事業の目的

対応が難しい事例等の支援を共有し、意見交換することや、新しい支援方法等の理解を深めることを通して、参加者が新たな知識・視点・考え方を獲得し、それぞれの仕事に活かすことができることを目的として、本事業を実施している。

2. 実施状況

令和元年度は8月～12月にかけて4回実施した。事例提供者は小児看護専門看護師2名、本学大学院修了生（CNSコース）1名、本学教員であった。

子どもと家族への支援に関わっている看護師、助産師、本学大学院修了生、大学院生、母性・小児看護学教員が参加して事例検討を行った。

3. 実施内容

実施の概要は以下の通りである。

- 第1回 8月8日（木）18:00～19:30 事例提供者：小児看護専門看護師 風間邦子氏（本学修了生）
テーマ：母親が終末期となった子どもの看護
参加者全11名
- 第2回 9月3日（火）18:00～19:30 事例提供者：本学大学院修了生 音三千子氏
テーマ：小児がんの子どもと家族への支援：退院後の生活に関する問題への対応
参加者全9名
- 第3回 11月26日（火）18:30～20:00 事例提供者：小児看護学 教授 西村真実子
テーマ：看護職に対する「子ども虐待防止をめざす支援者育成プログラム：気になる親子に‘気づく・かかわる・つなぐ’力を発揮するために」に関する検討
参加者全16名
- 第4回 12月14日（土）10:30～12:00 事例提供者：小児看護専門看護師 羽場美穂氏
テーマ：経口挿管児における小児病棟の対応
参加者全5名

5名～16名の参加者で各事例について情報共有し看護実践や支援について深く考える機会となった。第3回目は虐待予防に関する支援者養成プログラムについての検討を行ったことから、多数の施設からの参加があり、意見交換ができた。

対応が難しい事例に対し、子どもと家族への支援の具体策や他職種との連携等を検討できた。

4. 評価と今後の課題

多くの施設から参加者があり、それぞれの状況を共有でき、支援策を検討したことが、自施設での支援に活かせるという意見を得た。テーマを多様にするすることで、参加者の拡大にもつながった。次年度も参加者が関心を持てる内容を企画実施する。

1-2-4 地域包括ケア時代に活躍する看護職

企画担当：金子 紀子 / 地域看護学 助教

1. 事業の目的

地域包括ケアシステムにおける各方面の看護職等のそれぞれの現状と課題を出し合い、課題解決に向けた方策を検討する。

2. 実施状況

当初企画を変更し、以下のとおり実施予定だったが、新型コロナウイルス感染症の拡大のため、中止となった。

タイトル：地域包括ケア推進のために

実施日、時間：3月25日（水）、15時～17時

開催場所：本学管理棟2階（大会議室半分）、参加費：200円（資料代、飲み物代）

情報提供：阿川啓子先生（島根県立大学准教授）

「島根県の地域包括ケアシステムの一例」（インターネット回線によるビデオ会議）

進行：金子紀子

対象：病院の地域連携室の看護職、地域包括支援センター職員、療養型病院看護師、訪問看護師、他テーマに関心ある方等

内容：島根県の取り組み例の紹介と参加者との意見交換

3. 実施内容

企画が中止となったため、急遽3月下旬にアンケートを実施した。

対象は前年度企画ラウンドテーブル参加者等で、8名より回答いただいた。結果の一部は以下のとおりである（自由記載は省略）。

Q. 普段の仕事をしている中で、地域住民（利用者、患者等）に対しこれまでとは違った活動をしたい、と思うことはありますか。選択肢に○をつけ、それぞれに対する質問の回答を自由にお書きください。

A. ①思うことはあり新たな計画中【1名】

②思うことはあるが、実際は難しい【3名】

③思うことはない【2名】

④その他の回答【1名】具体的にはまだ計画していないが漠然と考えていることがある

Q. あなたの働く地域の地域包括ケアシステムは、構築されてきていると思いますか

A. はい【1名】、どちらでもない【1名】、いいえ【1名】、よく分からない【4名】、未回答【1名】

4. 評価と今後の課題

今年度当初計画していたコミュニティナースに関する企画は次年度開催の予定であり、アンケート結果を反映し、充実させていきたい。具体的には、コミュニティナースに関する質問や、回答者が地域で実践したいと考えている内容の検討、研修の開催日時等である。

1-2-5 新任保健師卒後スキルアップ研修会

企画担当：竹田 昌代 / 地域ケア総合センター 特任講師

1. 事業の目的

保健師としての実践能力を確実なものにするため、保健指導を実施するために必要な基本的な知識や技術を習得・確認するための学習会を実施し、現場で円滑な業務が遂行できるよう支援する。

2. 実施状況

実施場所：石川県立看護大学 地域ケア研修室、地域・在宅・精神看護学実習室

参加者数：県内の県・市町に勤務する就業1年未満の保健師15名

3. 実施内容

・テーマ：「保健指導のホ」

・内容：

第1回 令和元年8月23日

意見交換会(保健師として就業しての悩み)
母子保健指導の実際(新生児訪問・乳児健診)

第2回 令和元年8月30日

母子保健指導の実際(1歳半児健診・3歳児健診)
母子保健指導の実際(各市町との情報交換)
母子保健事業の実際(発達の気になる子への支援)

第3回 令和元年9月13日

成人保健事業の実際(健康診査の結果の見方と保健指導)
高齢者支援の実際(介護保険と地域支援事業)
保健師活動を考える(保健師活動全体)

・講師：石川県立看護大学附属地域ケア総合センター 特任講師 竹田 昌代

助言者：石川県立看護大学 地域看護学講座 教授 塚田久恵、准教授 阿部智恵子
元 内灘町保健師 本 弘美

・結果：乳幼児健診の問診のデモンストレーションや講義を通して、現場ですぐに役立てられるような母子保健指導の実際を学ぶとともに、各市町の母子保健事業についての情報交換を実施した。また、成人保健指導の実際や高齢者支援事業についても理解を深めた。

また、日頃の業務上の悩みやその解決法、自分が目指す保健師像についての意見交換や、先輩保健師の活動紹介を通して、今後の保健師活動を考える機会とした。

終了後の参加者アンケートから、「現場で活用できる知識ばかりでとても参考になった」「他市町の健診方法が様々で興味深かった」「他市町の新人保健師との顔つなぎの機会がもてた」、「地域の人が予防への意識を高められるような取り組みをしたいと改めて思った」「これから保健師としての生き方を考えるうえでとても参考になった」等の意見があった。



4. 評価と今後の課題

保健師個人のスキルアップのための努力と経験の積み重ねの必要性や、同世代の保健師間のつながりや職場の他職種との連携を持つことの必要性を学んだ等の意見が多く聞かれた。

新任保健師が保健指導を実施するために必要な知識や技術に自信を持ち、今後の保健師業務に前向きに取り組める動機づけの機会となるよう支援したい。

1-3 相談サービス事業

1-3-1 各種研修会等への講師派遣事業

看護・福祉・介護専門職の質の向上、県民の健康・福祉の向上、行政課題の解決に資することを目的に、看護研究の支援や、研修等へ本学専任教員が出向いた。

分野別派遣回数

番号	1	2	3	4	5	6	
種類	病院等	職能団体 (看護協会等)	行政	学校・教育機関	福祉・高齢者関係の 任意団体	その他	計
回数	31	11	34	4	1	2	83

No.	派遣講師	派遣日時	派遣場所	内容	主催者	種類
1	助教 大江 真吾	H31. 4. 1 R2. 3. 31	かほく市健康福祉課	興和、助言	かほく市	3
2	助教 大江 真吾	R1. 5. 10 17:30~18:30	独立行政法人国立病 院機構 金沢医療センター	看護研究講師	独立行政法人国立病 院機構 金沢医療センター	1
3	准教授 米田 昌代	R1. 5. 11 9:30~14:30	イオン御経塚ショッ ピングセンター	健康相談・支援相談	公益社団法人 石川県看護協会	2
4	講師 金谷 雅代	R1. 5. 25 9:00~12:30	医療法人社団浅ノ川 浅ノ川総合病院	看護研究指導講師	医療法人社団浅ノ川 浅ノ川総合病院	1
		R1. 6. 29 9:00~12:30				1
		R1. 10. 5 9:00~12:30				1
		R1. 12. 21 13:30~16:30				1
5	准教授 木森 佳子	R1. 6. 3 13:00~16:00	公益社団法人 石川県看護協会	実習指導者講習会講 師	公益社団法人 石川県看護協会	2
6	講師 清水 暢子	R1. 6. 11 16:00~18:00	公立宇出津総合病院	看護研修講師	公立宇出津総合病院	1
		R1. 11~12 16:00~18:00				1
		R2. 2~3 17:30~19:00				1
7	准教授 木森 佳子 助教 松本 智里	R1. 6. 14 13:30~18:00	公立能登総合病院	看護研究指導・研修 会講師	公立能登総合病院	1
		R2. 2. 1 8:30~11:30				1
8	教授 武山 雅志	R1. 6. 15 13:00~16:00	公益社団法人 石川県看護協会	訪問看護師基礎研修 講師	公益社団法人 石川県看護協会	2
9	教授 武山 雅志	R1. 6. 18 13:30~15:30	七塚健康福祉センター	ボランティア養成講座 講師	社会福祉法人 かほく市社会福祉協 議会	3
10	助教 大江 真吾	R1. 6. 19 17:30~19:30	独立行政法人国立病 院機構 金沢医療センター	看護研究講師	独立行政法人国立病 院機構 金沢医療センター	1
		R1. 6. 20 17:30~19:30				1

		R1. 6. 21 17:30～19:30				1
11	准教授 米田 昌代	R1. 6. 24 13:00～16:00	公益社団法人 石川県看護協会	実習指導者講習会講 師	公益社団法人 石川県看護協会	2
		R1. 6. 28 13:00～16:00				2
12	教授 西村 真実子	R1. 6. 24 17:30～19:00	石川県立中央病院	看護研修講師	石川県立中央病院	1
13	助教 磯 光江	R1. 6. 26 17:30～19:00	河北中央病院	看護研究指導講師	河北中央病院	1
		R1. 12				1
		R2. 1. 16				1
14	助教 金子 紀子	R1. 7	珠洲市総合病院	看護研究指導・講評	珠洲市総合病院	1
		R1. 10				1
		R2. 3				1
15	准教授 垣花 渉	R1. 7. 7 9:00～10:30	いしかわ総合スポーツ センター	スポーツ指導者養成講 習会講師	石川県スポーツ振興 課	3
16	講師 清水 暢子	R1. 7. 19 13:30～15:30	エコールみよた	生活・介護支援サポ ーター養成講座講師	長野県御代田町	3
17	講師 清水 暢子	R1. 7. 24 18:30～20:00	ラピア鹿島	在宅医療介護連携推 進事業多職種研修会 講師	中能登町	3
18	准教授 中道 淳子	R1. 7. 31 10:00～12:00	津幡町役場	介護予防メイト養成講 座講師	津幡町	3
		R1. 9. 4 10:00～12:00				3
19	教授 紺家 千津子	R1. 8	芳珠記念病院	臨床指導	芳珠記念病院	1
		R1. 10				1
		R1. 12				1
		R2. 2				1
20	教授 西村 真実子	R1. 8. 1 13:30～16:30	石川県庁	児童福祉司養成研修 講師	石川県健康福祉部 少子化対策監室	3
21	講師 曾根 志穂	R1. 8. 1 13:30～18:30	町立宝達志水病院	看護研修講師	宝達志水病院	1
22	特任教授 丸岡 直子	R1. 8. 15 9:00～16:00	公益社団法人 石川県看護協会	看護管理者教育課程 セカンドレベル講師	公益社団法人 石川県看護協会	2
		R1. 8. 17 9:00～16:00				2
		R1. 8. 30 9:00～12:00				2
		R1. 9. 26 13:00～16:00				2
23	准教授 桜井 志保美	H31. 8. 22 13:30～15:00	石川県立看護大学	健康講座講師	宝達志水町女性の会	5
24	特任講師 竹田 昌代	R1. 8. 27 13:00～15:00	かほく市役所	介護従事者研修講師	かほく市	3
25	教授 西村 真実子 准教授 米田 昌代	R1. 8. 28 10:00～12:00	かほく市議会庁舎	幼児の母親対象の 「Nobody's perfect 親 支援プログラム」講 師	かほく市	3
		R1. 9. 4				3
		R1. 9. 11				3
		R1. 9. 18				3
		R1. 9. 25				3
		R1. 10. 1				3
26	講師 清水 暢子	R1. 8. 30 13:30～15:30	緑会千寿苑地域交流 ホール	認知症疑似体験研修 会講師	七尾市社会福祉協議 会	3

27	講師 清水 暢子 講師 川村 みどり	R1. 9. 1～ R2. 2. 29 期間中 3 回	石川県立中央病院	看護研究支援・講評	石川県立中央病院	1
		1				
		1				
28	講師 清水 暢子	R1. 9. 6 19:00～21:00	御代田町保健福祉課	キャラバンメイトスキル アップ講座講師	長野県御代田町	3
29	教授 牧野 智恵	R1. 9. 7 13:30～16:30	石川県地場産業振興 センター	看護研修講師	公益社団法人 石川県看護協会	2
30	教授 川島 和代	R1. 9. 7 9:35～12:55	福祉総合研修センター	喀痰吸引等関係研修 講師	石川県社会福祉協議 会	3
31	教授 武山 雅志	R1. 9. 10 9:00～10:20	石川県警察学校	教養に係る講師	石川県警察本部警務 部	3
32	講師 清水 暢子	R1. 9. 10 13:00～14:30	第二慶寿苑	若年性認知症カフェ 「青空」における講師	中能登町高齢者支援 センター	3
33	教授 武山 雅志	R1. 9. 19 9:00～16:00	公益社団法人 石川県看護協会	看護管理者教育課程 セカンドレベル講師	公益社団法人	2
34	教授 牧野 智恵	R1. 9. 23 10:00～11:30	金沢大学附属病院	専門的看護実践力研 修事業講師	金沢大学附属病院	1
35	教授 武山 雅志	R1. 10. 13 13:30～16:30	かほく市七塚健康福祉 センター	主任介護支援専門員 養成研修講師	石川県介護支援専門 員協会	3
36	教授 武山 雅志	R1. 10. 16 9:00～11:50	石川県立看護大学	指導救命士養成講習 講師	石川県消防学校	4
		R1. 10. 21 9:00～11:50				4
37	教授 中田 弘子	R1. 10. 30	公立羽咋病院	事例検討会講師	公立羽咋病院	1
		R2. 3				1
38	教授 西村 真実子	R1. 11. 7 14:00～15:30	高岡市役所	要保護児童対策地域 協議会研修会講師	富山県高岡市	3
39	講師 曾根 志穂	R1. 11. 9 9:30～10:15	かほく市立大海小学校	薬物乱用防止教育講 師	かほく市立大海小学 校	4
40	学長・教授 石垣 和子 教授 塚田 久恵	R1. 11. 14 9:30～17:00	石川県庁	新任保健師研修会講 師	石川県健康福祉部健 康推進課	3
		R1. 11. 15 9:30～17:00				3
41	教授 川島 和代	R1. 11. 17 10:00～12:00	かほく市七塚健康福祉 センター	河北地域ボランティア 交流会講師	かほく市社会福祉協 議会	3
42	准教授 垣花 渉	R1. 11. 18 14:30～	かほく市七塚健康福祉 センター	かほく市老人クラブ研 修会講師	かほく市社会福祉協 議会	3
43	准教授 垣花 渉	R1. 11. 27 13:30～14:20	石川県地場産業振興 センター	記念講演会講師	石川県鉄工機電協会	6
44	講師 金谷 雅代	R2. 2. 5 12:00～14:00	石川県立錦城特別支 援学校	医療的ケア指導講師	石川県立錦城特別支 援学校	4
45	教授 塚田 久恵	R2. 2. 9 14:10～14:50	のと里山里海ミュージ アム	研究報告会講師	能登総合研究会	6
46	教授 塚田 久恵	R2. 2. 14 10:00～12:30	石川中央保健福祉セン ター	新任保健師研修会講 師	石川中央保健福祉セ ンター	3
47	助教 千原 裕香	R2. 3. 4 10:00～11:30	石川県女性センター	育休からの職場復帰・ 再就職支援パネリスト	石川県	3
48	教授 西村 真実子 臨時助教 後藤 亜希	R2. 2. 12 10:00～12:00	かほく市議会庁舎	令和元年度「乳児の母 親対象の 「Nobody's perfect 親 支援プログラム」講師	かほく市	3
		R2. 2. 19				3
		R2. 2. 26				3
		R2. 3. 4				3
		R2. 3. 11				3
		R2. 3. 18				3

1-3-2 病院への事例・看護活動・研究等の指導助言実施状況（再掲）

地区/県	派遣病院名	指導内容	講師名		回数
金沢	医療法人社団浅ノ川 浅ノ川総合病院	看護研究指導講師	講師	金谷 雅代	4
	金沢大学附属病院	専門的看護実践力 研修事業講師	教授	牧野 智恵	1
	独立行政法人国立病院機構 金沢医療センター	看護研究講師	助教	大江 真吾	4
	河北中央病院	看護研究指導・講評	助教	磯 光江	3
	石川県立中央病院	看護研究講師 看護研究支援・講評	教授	西村 真実子	1
			講師	清水 暢子	3
		講師	川村 みどり		
能登	町立宝達志水病院	看護研修講師	講師	曾根 志保	1
	公立能登総合病院	看護研究指導・研修 会講師	准教授	木森 佳子	2
			助教	松本 智里	
	公立宇出津総合病院	看護研修講師	講師	清水 暢子	3
	珠洲市総合病院	看護研究指導・講評	助教	金子 紀子	3
公立羽咋病院	事例検討会講師	教授	中田 弘子	2	
白山	芳珠記念病院	臨床指導	教授	紺家 千津子	4
				計	31



2 地域連携・貢献事業

2-1 地域連携事業

2-1-1 来人喜人能登健康づくり支援事業

企画担当：長谷川 昇 / 機能・病態学 教授

1. 事業の目的

能登町は産業基盤が脆弱であり、かつ就学、就職時に若者が町外に流出し、少子高齢化、過疎化が急激に進行している。2015年の能登町の高齢化率は45.7%、2045年予測は57.7%であり、生産年齢人口が高齢者人口を大幅に下回りつつある。それに伴って、地域住民の健康な生活を支えていた地域のシステム、伝統文化、コミュニティの絆、地域産業などが減退しつつある。そうした現状を踏まえると、能登町の最大の課題は少子高齢化と高齢者等の医療、介護である。その補完的な解決策として交流人口の拡大と健康に関わる社会的文化的な活動の強化が考えられる。本プロジェクトでは看護大学の特色を踏まえ、健康問題、特に健診率向上キャンペーンを展開すると同時に、運動と食事生活に関わる文化、社会活動において地域で活動する諸団体と連携、交流しながら住民の健康づくりをサポートする。

2. 実施状況

令和元年5月5日 「第33回猿鬼歩こう走ろう健康大会」に参加。健康キャンペーン実施。
令和元年10月19日～20日 石川県立看護大学学園祭にて「クライネメッセ」・能登フェア開催。

3. 実施内容

- ・能登町健康福祉課、健康大会事務局、能登高校地域創造学科、能登町社会福祉協議会など能登町の連携団体と協力しながらその活動を支援することができた。
- ・歩こう走ろう健康大会では、大学から学生（10名）、教職員および本学関係者（12名）卒業生（2名）が参加し、地域間交流ができた。
- ・大会での健康キャンペーンでは、学生も健康チェックに参加し、大会参加者や地元住民との交流ができた（113名）。大会に健康キャンペーンを継続して参加してきた結果、健康チェックの参加者が年々増加している。
- ・能登町と看護大学が連携して住民の健康を支援するネットワーク基盤ができた。
- ・大学祭でのクライネメッセでは、ジェラード、能登牛井の販売を通じた能登地区の紹介を行い、かほく市民との交流ができた。また、能登高校の出店で、充実した能登のPR活動ができた。
- ・看護大学の学生、教職員の能登への関心が高まった。



4. 評価と今後の課題

- ・引き続き住民の健康づくりに意義があると思う事業をこれまで培ってきた連携のネットワークを使って実施する。
- ・本事業とそこで育んできた枠組みを基盤として、本学が一つの目標とする「地域の健康づくりにアプローチできるグローバルな視野を持った人材を育成」（ヒューマンヘルスケア人材育成プロジェクト）に展開、発展させたい。



2-1-2 「ワクワク健康サークル」活動

企画担当：垣花 渉 / 健康体力科学 准教授

1. 事業の目的

「スモールチェンジ活動」とは、健康の維持・増進を目指し、①続けられる小さな行動から始める、②続けられたら行動のレベルを少し上げる、③続ける工夫をする、という段階的な健康づくりの手法である。本事業は、「スモールチェンジ活動」を通して住民主体の健康づくりの仕組みをつくるため、大学はそれを支援することを目的とする。

2. 実施状況

看護大学近隣の市や町に住む者を対象に、毎月第3または第4水曜日の19時～20時半に健康教育を実施する。毎月のテーマを参加者が決め、教員と学生はテーマに基づく講義、グループワーク、体操を行う。

3. 実施内容

4月：テーマ「ストレスの解消法」、学生：16名、一般：17名
5月：テーマ「脱水症」、学生：16名、一般：15名
6月：テーマ「認知症」、学生：10名、一般：15名
7月：テーマ「認知症」、学生：20名、一般：10名
8月：テーマ「ウォーキングで体調管理」、学生：8名、一般：9名
9月：テーマ「ノルディックウォーキング」、学生：0名、一般：12名
10月：テーマ「骨を強くする生活習慣」、学生：12名、一般：9名
11月：テーマ「目の病を知る」、学生：12名、一般：10名
12月：テーマ「クリスマス交流会」学生：17名、一般：14名
1月：テーマ「ビタミンの効果」学生：6名、一般：14名
2月：テーマ「呼吸法」学生：6名、一般：12名

4. 評価と今後の課題

毎月の活動を着実に行うことができている。今後の課題は、コロナウイルスの感染拡大のため、サークル活動をどのような形で継続するかの戦略を立てることである。

2-1-3 棚田が織りなす食・緑・健康の郷づくり

企画担当：垣花 渉 / 健康体力科学 准教授

1. 事業の目的

高齢者が主体的に社会参加する、または互い支え合うという地域づくりの行為そのものは、高齢者自身の健康を維持・増進させることが明らかにされている。このことは、著しい人口減少と医療体制の脆弱さを抱える限界集落の活性化策としても注目されている。本事業は、限界集落を舞台に、地域資源である「食」「緑」「人」を活かした地域づくりを住民が主体的に行い、研究者や専門職者はそれを支援する体制を構築することを目的とする。

2. 実施状況

看護大生は限界集落へ出向き、住民と交流を深める。協働する地域活動は、かぼちゃの農作業体験、住民の健康チェック、民泊体験、秋の幸せ収穫祭の開催、そば祭りの開催である。

3. 実施内容

- ・ 5月：住民の形態・体力測定（参加者：学生31名、教員2名、住民20名）
- ・ 6月：農作業・民泊体験（参加者：学生6名、教員2名、住民10名）
- ・ 8月：かぼちゃの農作業体験（参加者：教員2名、住民5名、一般1名）
- ・ 9月：かぼちゃの農作業体験（参加者：学生6名、教員1名、住民5名）
- ・ 10月：秋のしあわせ収穫祭の開催（参加者：学生14名、住民と一般60名）

4. 評価と今後の課題

予定した交流地域活動は、おおむね行うことができた。今後の課題は、コロナウイルスの感染拡大のため、高齢住民との交流活動をどのような形で継続するかの戦略を立てることである。

2-1-4 モールウォーキング事業

企画担当：武山 雅志 / 心理学 教授

1. 実施目的

モールウォーキング事業は、冬場の運動不足の解消を目的とした「か歩く健康ウォーキング」事業に、かほく市およびイオンモールかほくと連携して取り組み、参加住民の健康チェックとモールレッスンにおけるミニ講話等を行うことを目的としている。

2. 実施状況

- 歩数計活用型健康ウォーキングの事前健康チェック
8/19（月）～8/21（水）かほく市ほのぼの健康館
- か歩く健康ウォーキング事業開会式および健康チェック
開会式 9/1（金）10時～11時 イオンモールかほく センターコート
- モールレッスン
10/4（金）「ストレスとの上手な付き合い方ーコミュニケーション編ー」

3. 実施内容および成果

歩数計活用型健康ウォーキングの登録者148名（継続138名、新規10名）に対して事前の健康チェックを教員のべ19名と学生のべ22名で実施した。本事業の閉会式とモールレッスンおよび事後の健康チェックは新型コロナウイルスの感染拡大の影響のため、実施することができなかった。

モールレッスンではそれぞれ160名ほどの参加者があり、教員1名で対応した。

本事業も4年目となり、継続参加の方がかなりある一方で、新規参加が少ない状況となっている。

4. 評価と今後の課題

平成30年度同様、本事業の継続者の人数にはそれほどの減少は認められないが、新規参加者がかなり少ないという結果となった。

4年間の測定結果を多角的に分析した上で、今後のあり方を検討する段階にあるのではないかと印象を受ける。



2-1-5 災害につよい街づくり事業

企画担当：武山 雅志 / 心理学 教授

1. 実施目的

宮城県亶理郡亶理町では被災された多くの住民は仮設住宅から災害公営住宅へとその生活基盤を変化させている。しかしその地域自体、高齢化が進んでおり、新しい絆づくりには外部からの働きかけが必要な状況である。

令和元年度は引き続き亶理町社会福祉協議会や地元民生委員の方々と連携して、その絆づくりに学生によるボランティア活動を活用するとともに、地元かほく市での「災害につよい街づくりフォーラム」開催を通じて防災意識のさらなる向上を目指すのが目的である。

2. 実施状況

○災害につよい街づくりフォーラム 2019

日時：令和元年度 11月17日（日）9:30～11:30

場所：石川県立看護大学 大講義室 参加者：134名

内容：

- ・基調講演「平成30年7月豪雨の経験から ～地域の力を信じて～」
（倉敷市社会福祉協議会地域福祉課主事 生活支援コーディネーター 松本 和徳氏）
- ・活動報告 上伊丹町、内日角、災害ボランティア・サークルふたば

○被災地学生ボランティア活動

例年どおり宮城県亶理郡亶理町の災害公営住宅集会所を会場としてボランティア活動を行うこととして、令和2年3月3日（火）～3月5日（木）の日程で準備を進めた。しかし最終的に新型コロナウイルスによる感染を懸念して延期とした。なお参加予定は学生27名と教員3名であった。

3. 実施成果

災害につよい街づくりフォーラムの基調講演では「平成30年7月豪雨の経験から ～地域の力を信じて～」と題して西日本豪雨災害で被災した真備町のある倉敷市社会福祉協議会の松本生活支援コーディネーターにお願いした。活動報告は上伊丹町と内日角、ふたばから行った。地元自主防災会会員をはじめ、七尾市や白山市、県立大からも参加があり、平成30年度よりも多くの参加があった。地域との連携の重要性を改めて感じる貴重な機会となった。

被災地学生ボランティア活動は長時間にわたるバス移動のため、残念ながら延期をせざるを得なかった。3月初めのボランティア活動を楽しみにしていらっしやる亶理町の住民の方も多く、新型コロナウイルスによる感染の終息状況を見て、是非とも訪れたいと考えている。

4. 今後の取組予定

災害につよい街づくりフォーラムについては、開催当日が社会福祉会関連の行事と重なるという事態になった。令和2年度はそのようなことがないように、その準備段階からかほく市社会福祉協議会にも加わってもらうことで日程的な調整が可能にしたいと考えている。

被災地学生ボランティア活動については、長時間のバス移動のため新型コロナウイルスの終息状況によっては従来どおりの活動は困難が予想される。代替手段としてどのような活動が可能なのか柔軟な対応ができるよう準備したいと考えている。



2-1-6 農福連携いしかわ型ヒツジ飼育体験教室

企画担当：清水 暢子 / 精神看護学 講師

1. 事業の目的

今後、就労を考えている精神障害のある方や特別支援学校の卒業を控えている方、就労支援を行っている事業所を利用されている方を対象に、ヒツジの餌やり・肥出し（糞だし）・餌作りなどを通じて畜産体験を行ない、このヒツジ飼育体験を通して、参加された方が動物やそれを飼育している人への関心、就労への意欲や希望、社会活動や社会参加への意欲、畜産農家や畜産業への関心を持ってもらうことを目的に実施した。

2. 実施状況

対象：石川県内の精神科デイケア施設 就労支援対象者とその指導者

石川県内の地域活動支援センター利用者とその指導者

講師：石川県立大学 生産科学科 教授 石田元彦

石川県立大学 ポケットゼミ「ヒツジ」学生3名

石川県立看護大学 精神看護学 講師 清水暢子

協力：日本海倶楽部 就労継続支援B型事業所 ザ・ファーム

能登町白丸公民館 石川県立看護大学 4学生 5名

表1. 開催日時・主催・場所・参加人数について

回数	月日	時間	参加事業所	人数
第1回	R1. 8. 10 (土)	10:00~16:00	能登町白丸公民館と就労訓練 B 型事業所 ザ・ファーム ヒツジの毛刈りと羊毛フェルト体験学習	30名
第2回	R1. 11. 5 (火)	10:00~13:00	岡部病院 デイケア ピア ヒツジ飼育体験学習	5名
第3回	R1. 11. 6 (水)	10:00~13:00	ときわ病院 デイケア キウイ ヒツジ飼育体験学習	15名
第4回	R2. 3. 11 (土)	10:00~	能登町白丸公民館	(新型コロナウイルス感染 予防対策のため中止)
第5回	R2. 3. 11 (土)	13:00~	能登町上町公民館	

3. 実施内容と成果

今年度は県立大学ポケットゼミ「ヒツジ」のご協力を得て、能登町の公民館を中心とした地域の方と障害のある方が触れ合い、一緒に作業を行うことを目的とした「羊毛フェルト体験教室1回」と障害のある人に畜産型の農福連携就労支援を体験してもらうための「ヒツジ飼育体験教室2回」の計3回実施した。

1) 能登町公民館を中心とした羊毛フェルト体験教室

看護大学は県立大学と共同で知的障害者が自力でヒツジの生産活動ができるための研究開発事業に、就労継続支援事業所である日本海倶楽部ザ・ファームの協力を得て取り組んでおり、今回のフェルト教室は、ザ・ファームで生産した羊毛の染色、フェルト加工の過程を能登町の地域の方々に学んでいただく中で、就労支援事業所と地域住民との交流を深めるために開催した。

公民館を中心とした手芸活動を地域の方々8名と日本海倶楽部のスタッフ2名、利用者4名と一緒に県立大学学生の指導の元、看護大学学生と協力し、羊毛の選別、洗浄、染色、羊毛フェルト細工のやり方を示し、一緒に作業をした。たくさんのフェルト細工を作ることができ、参加者は喜んでいて。障害者施設の利用者やスタッフも「普段、地元に住ながらなかなか公民館の方た

ちと接する機会が無いので、良い機会を作っていただいた」と歓迎であった。施設で飼育中のヒツジを公民館に連れ出し、参加者の前でヒツジの毛刈りも行った。普段ヒツジの世話を担当している障害のある方は、手慣れた手つきでヒツジをなだめ、毛刈り作業を補助していた。初めて毛刈りを見た地元の参加者からは見事な毛刈りの様子に「こうやってこの羊毛ができるんだ」と感心していた。

2) 障害のある方々への農福連携畜産型、就労訓練支援ヒツジ飼育体験教室

ヒツジ飼育体験教室では、県立大学石田名誉教授の指導のもと、石川県内2つのデイケア事業所合計20名の利用者の方に飼育体験を行った。まずはヒツジ飼育に関する基本的な知識を身に付けていただいた後、今回は県立大学の実験農場をお借りし、実際に飼育体験実習を行った。最初はヒツジのそばによるのも恐る恐るだった体験者も、おなかのすいたヒツジが自分たちが運んだ餌を無心に食べる姿を見て「見ているだけで癒されるわ。」「このもふもふ感がいい」とヒツジへタッチングし始めた。ヒツジは非常に敏感な動物で感受性が高いこと、人の顔を認識する能力が高く、見慣れた顔があると安心して寄ってくること、などを学んだ利用者はヒツジを驚かせないように優しくタッチングしながら、ヒツジ飼育の難しさや楽しさ、癒される思いを体感していた。実際、防塵服で利用者の顔を覆い隠してしまうと全く寄ってこなくなるヒツジを見て、「こんなに敏感な動物なんだ」ということも学んだ体験教室であった。

4. 評価と今後の課題

今回は、日本海倶楽部のヒツジ達の体調が不良であったため、急遽、県立大学実験農場のヒツジをお借りし体験学習を行ったが、体験する側もさせる側も体調管理が重要であり、安定した時期を選んで次回は企画していく必要がある。また、今回はヒツジの体験学習のみに留まらず、地域共生社会を目指して地元公民館の協力も得て、同じ地域にある障害者施設とその利用者の方々、また地域の方々が協力して1つの作業を行うことが実施できた。後半の2回は新型コロナウイルス予防対策の影響で開催が延期となったが、今後もこうした共同で作業を行う機会を作り、地域の方々との互いの理解を深めるための交流の場も作って行っていきたい。

写真1 白丸公民館で地域の人と障害のある人が一緒になって羊毛の選別をする様子



写真2 実験農場でヒツジの飼育体験学習をするデイケア利用者の方々



2-2 生涯学習講座

2-2-1 子育て中の母親たちのための「どろっぷ・イン・さろん」

企画担当：西村 真実子 / 小児看護学 教授

1. 事業の目的

継続的な支援の実現には、「何かあったらこの人に相談しよう」というような信頼関係を築くことが重要であり、そのためにはまずは親子と支援者が、または親同士が短期に集中して会い、お互いを知り合い分かり合う必要がある。「子育てどろっぷ・いん・さろん」は、育児困難に悩む親同士および支援者と親との信頼関係を育てながら親を継続的に支援していこうとするシステム(妊婦プログラム→乳児の母への Nobody's Perfect(NP)プログラム→幼児 NP プログラム→フォローアッププログラム→本さろん)の最終段階の支援策である。子育てに悩みをもつ母を対象に、①エンパワーメント(自己効力感を高める等)②サポートし合う仲間づくり③自分に取り入れられそうな子育て等のやり方や考えを得る④自分の客観視⑤子育てへの不安や困難感の軽減⑥レスパイト・ケアの6点をねらいとし、子どもと離れて過ごす場所の提供と、悩みについて安心して話せるグループミーティングなどを行っている。

2. 実施状況

実施状況：

1)どろっぷ・イン・るーむ(午前):託児を行い、母親には一人でまたは、他の参加者と自由に過ごす時間・場所を提供する。スタッフも母親の相談に対応した。癒しや身体的ケアも充実するために、フットバスができるスペースを設けた。

2)親育ち・子育てを考える会(午後):Nobody's Perfect 親支援プログラム(以下 NP)参加経験のある母親を対象に、託児を行い、NP 方式を取り入れたグループミーティングを全5回行った。

【スタッフ】西村真実子、米田昌代、金谷雅代、曾山小織、千原裕香、後藤亜希、院生

回数	開催日	るーむ参加者	考える会参加者	託児児童数
1回	R1.8.7 (水)	5名	7名	5名
2回	R1.9.10 (火)	4名	9名	7名
3回	R1.10.2 (水)	2名	9名	7名
4回	R1.11.6 (水)	3名	6名	2名
5回	R1.12.18 (水)	4名	8名	5名

3. 実施内容

「NP 親育ち・子育てを考える会」で話し合われた主なテーマ

- 1回目：お互いを知ろう 自分の気がかりを話そう・みんなの気がかりを聴こう
- 2回目：いらいら・子どものへの対応について
- 3回目：夫・親との関わりについて
- 4回目：夫との関わりについて
- 5回目：自分の更年期と自立に向けた思春期の子どもへのかかわり方



NP 親育ち・子育てを考える会の実施風景

4. 評価と今後の課題

・参加者から「気のはらない人と安心して話ができ、新たな気づきを毎回もらえた」、「夫や親にはうまく甘えられないが、ここではどんな話でも聞いてもらえて、自分が唯一甘えられる場」という感想が聞かれた。これらのことから、同じような悩みを抱える仲間に受け入れられることにより安心感や心の余裕等が生じ、加えて悩みや経験・考えをサポートティブに共有する話し合いを通して、現実吟味/カタルシス/自分に取り入れられるやり方・考えの獲得等が起こり、日々の子育て等にプラスになったり、子育て状況の悪化の防止になっていることが伺えた。また、乳幼児期の親を対象とした話し合いの場は子育て広場などいろいろあるが、思春期の子どもを持つ親が参加できる場は少ない中、このどろっぷ・イン・さろんでは思春期を迎える子どもへの接し方や自分の更年期や親の介護について考える機会もあり、幅広い年齢層の子どもを持つ親同士の仲間づくりの場となっている。

・「親育ち・子育てを考える会」は、昨年度までは我々が実施した NP に参加した母親を対象に勧誘を行っていたが、今年度は他の NP ファシリテーターの NP に参加した母親も参加できるように、健康福祉センターや子育て広場にチラシを置いたり、県内の NP 等子育てプログラムの全ファシリテーターへの周知を行った。そのチラシを見て参加した母親が数名あり、「来てよかった。また来たい」との感想があった。次年度もニーズのある母親に届くよう広報の方法を工夫していく。

2-2-2 あかちゃんをお空にみ送られ方の自助グループに対するサポート活動

企画担当：米田 昌代 / 母性看護学 准教授

1. 事業の目的

あかちゃんを亡くされた方がアクセスしやすいような体制作りと会の広報、お話し会開催によって、あかちゃんを亡くされ方の自助グループ活動を支援する。また、個別相談体制、医療施設・行政との連携を強化していく。

- 1) お話し会の運営をサポートする。
- 2) 体験者、臨床、地域からの相談があった場合、5つの自助グループのネットワークを通じて対応できる。

2. 実施状況 3. 実施内容

①お話し会開催 日時・場所

対象：あかちゃん（流産・死産・新生児死亡・乳児死亡等）であかちゃんを亡くされた方
ひまわりの会は年齢を問わずお子さんを亡くされた方、グリーフケアカフェはあらゆる喪失に対応

回数	月日	時間	主催	場所	参加人数
第1回	H31. 4. 28 (日)	13:30~16:00	ひまわりの会	石川県女性センター	10
第2回	H31. 5. 12 (日)	9:30~11:30	グリーフケアカフェ	シェアマインド金沢	6
第3回	R1. 6. 3 (月)	10:00~12:00	小さな天使のママの会	石川県立看護大学	6
第4回	R1. 7. 20 (土)	9:30~11:30	グリーフケアカフェ	シェアマインド金沢	5
第5回	R1. 7. 28 (日)	13:30~16:00	ひまわりの会	倶利伽羅塾	5
第6回	R1. 9. 1 (日)	9:30~11:30	グリーフケアカフェ	シェアマインド金沢	5
第7回	R1. 10. 7 (月)	10:00~12:00	小さな天使のママの会	石川県立看護大学	6
第8回	R1. 10. 26 (土)	9:30~11:30	グリーフケアカフェ	シェアマインド金沢	4
第9回	R1. 10. 26 (土)	13:30~16:00	ひまわりの会	金沢勤労者プラザ	8
第10回	R1. 12. 22 (日)	9:30~11:30	グリーフケアカフェ	シェアマインド金沢	5
第11回	R2. 1. 26 (日)	10:00~12:00	ひまわりの会	石川県社会福祉会館	5
第12回	R2. 2. 3 (月)	10:00~12:00	小さな天使のママの会	石川県立看護大学	7
第13回	R2. 2. 15 (土)	9:30~11:30	グリーフケアカフェ	シェアマインド金沢	4

②適宜メール相談・電話相談・面談

富山で自助グループを立ち上げたいという方の相談にのり、少しずつ活動を開始し始めている。小さな天使のママの会代表と大学での面談や家庭訪問を実施。メールでの相談適宜対応、自助グループにつながる方、メールでの相談で終わる方様々である。

③ひまわりの会 自死予防活動

R1. 8. 24(土) 13:30~16:00 こころの健康づくり講演会 運営・参加
石川県・かけがえのない命をまもるネットワークいしかわ(ひまわりの会所属) 主催

④体験者の話を聞く場

R1. 7. 3 (水) 13:00~14:30 母性看護方法論の講義枠で自助グループ代表者・メンバーの方に語っていただく。

⑤広報活動

R1. 9. 21 (土) 北國生きがい支援授業の講演で活動紹介し、ちらしを配布した。

R1. 11. 9 (土) 第 13 回東アジアグリーフの集い in 金沢のブースにてちらしを配布した。
こころの健康センターの広報誌に掲載していただいている。

⑥全国のあかちゃんを亡くされた方の自助グループ、支援者との情報交換

第 21 回ペリネイタル・グリーフケア検討会にて、宮崎天使ママの会代表の黒木啓子氏に来ていただき、小さな天使のママの会の代表とメンバー、ハートシェアの会のメンバー、今から自助グループを立ちあげようとしている体験者と交流し、活動についての情報交換が行えた。

東アジアグリーフの集いにて全国のグリーフケアに取り組む人々や自助グループ関係者、遺族と交流することができた。

⑦石川グリーフの会との連携

あらゆるかけがえのない対象の喪失への悲嘆に対応する石川グリーフケアの会では、2 ヶ月に 1 回、グリーフケアカフェを開催し、哀しみを打ち明ける場を提供している。この会をきっかけにひまわりの会にも参加し、今まで、抑えていた哀しみを表出することができていた方もおられた。会同士、連携しながら、引き続き、相談に対応していく。

4. 評価と今後の課題

お話会は毎回、4～10 名の参加者がみられ、新規の参加者も毎回みられることから、今後も定期的お話会開催は必要である。今年度は石川グリーフケアの会も加わったことで、お話会の開催を増やすことができているため、参加の機会は提供しやすくなっている。お話し会に躊躇する方もおられるため、メールでのやりとりも大切にしながら、必要時、お話会につなげていきたい。

今年度は北國生きがい支援、東アジアグリーフの集いと外部に発信する機会が多かった。会の認知度も上がったと考えられるため、今後の活用が期待される。

2-2-3 ヘッドマウントディスプレイを使用した『認知症疑似体験教室』

～認知症者にやさしい町づくりを考える～

企画担当：清水 暢子 / 精神看護学 講師

1. 事業の目的

本企画は認知症疑似体験プログラム用に開発された画像を使用し、参加者にはヘッドマウントディスプレイ；HMDを装着してもらい、そこに映し出される映像や音声により認知症高齢者の視線や移動の速度、行動を疑似体験してもらう。その体験が地域住民への認知症高齢者の理解をうながす啓発活動として、また認知症を正しく理解すること、認知症高齢者に対して人間としてあたたかく接することができるような認知症支援者への啓蒙活動を目的とする。

2. 実施状況

対象：介護予防・痴呆予防講習会、家族介護者の介護教室や認知症サポーター研修など

地域活動の勉強会参加者、介護専門職者勉強会（20名～30名程度）または、その指導者

講師：石川県立看護大学 精神看護学 講師 清水暢子

表1. 開催日時・主催・場所・参加人数について

回数	月日	時間	開催場所	人数
第1回	R1.7.12(金) 7.24(木)	19:00～20:30	中能登町あじさい会研修会 認知症の方の世界をみてみよう！	50名
第2回	R1.7.19(金)	13:30～15:00	長野県御代田町 生活・介護支援サポーター養成講座	28名
第3回	R1.8.30(金)	13:30～15:00	七尾市 認知症の人にやさしいまちづくり研修会	68名
第4回	R1.9.6(金)	19:00～21:00	長野県御代田町 キャラバンメイトスキルアップ研修	20名
第5回	R1.9.10(火)	13:30～15:30	なかのと若年性認知症カフェ 「青空」	15名

3. 実施内容および成果

(講義内容) 1回 約90分の講義内容は以下の通りであった。

- ① 認知症予防、近年の動向
- ② 微笑みの国 タイ王国のシニアライフと認知症対策
- ③ 認知症本人の心理や行動を疑似体験（ヘッドマウントディスプレイ使用）
- ④ 認知症サポーター養成講座を開催する際のポイント
- ⑤ 今からできる自分たちで行える認知症があっても暮らしやすい町づくりとは？

実際に動画やHMDを通して認知症の方が見る世界を疑似体験してもらった。

また体験後には「今、登場している認知症者が何を考え、周囲の環境をどう感じているのか。」
「逆に認知症者を取り巻く周囲の人はどう思っているか」「どんな支援があったら、困難を感じずに認知症者と介護者が地域で生活していけるのか」についてグループワークを行いながら、参加者が考えをまとめ、発表を行ってもらった。

4. 評価と今後の課題

参加者のアンケート結果から「認知症者とその介護者は多くの人と話すことが大切、周囲の人

はまわりの方との差別なく付き合う笑顔が大切」「嫌がらず、面倒くさがらず、接することが大事なのですね」などの地域社会からも『孤立にさせない』、『声をかける』、『接することが大事』等の身近な人でも今すぐにでも取り組める事について学んでいただいた。この学びを活かし、自分たちが今すぐにでもできる「認知症者にもやさしい町づくり」について考えることができたと思う。これらのことがスムーズに実施につなげられるためには毎年1回以上の研修会を通じ、継続的な認知症者理解のための普及啓発活動が必要であると感じた。

七尾市での講習会の様子が NHK 金沢放送局の夕方のニュース「認知症の人の見え方を学ぶ研修会 | NHK 石川県のニュース」でも取り上げられた。

写真1 .ヘッドマウントディスプレイを使用しながら認知症疑似体験を行う参加者



写真2 ヘッドマウントディスプレイを使用しない場合は同時に動画でも体感できる。



2-2-4 地域公開講座

企画担当：金谷 雅代 / 小児看護学 講師

1. 事業の目的

本事業は2つの目的で実施した。

- ① かほく市いきいきステーションにて地域公開講座を開催し、看護大学教員の知見を市民に還元する。
- ② いきいきステーションに定期的に訪問し、学生・教員と地域のシニア世代との交流活動を行い、学生においては対象理解や地域のニーズ把握を促進し、シニア世代には社会参加の機会となる。

2. 実施状況

- ① いきいきステーションの協力のもと、地域公開講座を5回実施した。
企画書をいきいきステーションに提出、開催概要を提示し、いきいきステーションからかほく市の広報誌に掲載、各回の参加者募集を依頼した。
- ② いきいきステーションでの地域住民と学生との交流
授業のない時間帯(木曜日の13:00~15:00)に学生2~3名がいきいきステーションを訪問し、「持ち寄りカフェ」に参加している地域住民と交流した。

3. 実施内容

① 地域公開講座 (全5回)

- | | |
|--------------------------------|--------------|
| <第1回>10月31日(木) 13:30~15:00 | 担当者：寺井梨恵子講師 |
| テーマ：高齢ドライバーの視線の変化 | 参加者：10名 |
| <第2回>11月19日(火) 13:30~15:00 | 担当者：武山雅志教授 |
| テーマ：寝たきりにならないために | 参加者：8名 |
| <第3回>12月19日(木) 13:30~15:00 | 担当者：川村みどり講師 |
| テーマ：お薬を飲む理由を考えよう | 参加者：10名 |
| <第4回>2020年1月21日(火) 13:30~15:00 | 担当者：竹田昌代特任講師 |
| テーマ：かほく市の高齢者の現状と介護保険サービス | 参加者：13名 |
| <第5回>2020年2月6日(木) 13:30~15:00 | 担当者：金谷雅代講師 |
| テーマ：孫育てを語ろう | 参加者：9名 |

各回参加者は10名程度であるが、申し込みは10名を越えていた。講義を聴くだけでなく、測定やグループワークなどを行い、これらを通してテーマについて参加者に考えてもらう機会となった。繰り返しの参加者もあり、広く知識を学んでもらえるなど、成果はあったと考える。次年度のテーマの希望もあがり、市民の健康生活への貢献は今後も必要と考える。

② いきいきステーションでの地域住民と学生との交流

いきいきステーションで「持ち寄りカフェ」が開催される日程に合わせて、学生数名が訪問し、参加者と交流した。参加者から「若いパワーをもらえた」などの言葉をいただき、学生も楽しみに訪れて交流がはかれた。

4. 評価と今後の課題

かほく市の広報誌、いきいきステーションからの案内も有効で、地域公開講座は参加定員を毎回満たしている。参加者からは、ためになったという声もきかれ、健康への働きかけにつながっ

ていると考える。今年度は本学担当者の提供可能なテーマで講話を企画したが、地域住民のニーズも把握して、次年度の企画につなげたい。また、参加者の実際の健康度について、測定していくことも課題であり、その方策を検討していく必要がある。

学生の「持ち寄りカフェ」への参加は、木曜日の午後開催のいきいきステーションでの企画のため、本学学生が参加するには時間の問題、試験等もあり、継続に課題があるが、学生には顔なじみになった方々とよい交流が続いている。交流の継続により、本事業の目的である対象理解や地域のニーズについて考えることができたかを把握していくことも必要である。



2-2-5 若手看護師へのグリーフケア

～終末期看護および看取りの体験を共に語り、心をリフレッシュ～

企画担当：牧野 智恵 / 成人看護学 教授

1. 趣旨

オルゴール療法には「治療効果」として、「想像力の開発」「心理的効果」があるといわれています。看護師は、受け持ち患者の死と向き合う体験をしても、ゆっくり自分の心を癒せる場がないといわれている。そういった体験を持つ看護師同士が、オルゴール療法や自らの体験を語る場の中を持つことで、悲嘆を乗り越え、今後の看護実践を意味あるものできると考えた。

2. 実施状況

・開催日時・場所：

- 1回目：令和元年8月10日(土)10:00～13:00 石川県立看護大学 地域ケア総合センター
- 2回目：令和元年9月21日(土)10:30～14:00 ハーブの里・響きの森(ミントレイノ)

・担当責任者：牧野智恵(石川県立看護大学 教授)

瀧澤理穂(石川県立看護大学 助教)、学部生(4年生)2名

・参加者数； これまでに終末期看護実践を体験した看護師 4名

3. プログラム内容

1回目

10:00～11:30 自己紹介・対話タイム
休憩

11:45～13:00 対話タイム

2回目

10:30～11:10 対話タイム

11:10～12:15 オルゴール療法体験
～休憩～

13:30～14:40 対話タイム

(がん体験者と本学教員参加)



4. 評価と今後の課題

1回目と2回目に参加者へのアンケートを実施しその変化を見た。その結果、「心の辛さが軽減した」「自分の思いを十分話すことができたと感じる」「自分の辛い思いを他者に語っても良いと感じる」「終末期の患者と積極的に関わりたいと思う」は2回目には上昇していた。また1回目、2回目とも終了後には、晴れ晴れすると回答していた。また、自由記載には、「終末期ケアができるようになったと感じる」「当たり前のケアの大切さに気付く」「他施設の人とのグリーフワークで良かった」など回答があった。今回は新人を対象としていたので、今後は、経験豊かな看護師も対象にしていきたい。

2-3 ワンストップサービス事業

1. 事業の目的

ワンストップサービス事業の目的は、石川県内の市町村、企業、NPOなどの市民を対象とした地域貢献事業についての相談を受け付け、運営が円滑に行われるように支援することである。また石川県立看護大学が立地する地元かほく市の企業をはじめ、石川県内における看護・介護・福祉等の領域におけるさまざまな製品や用具の開発など、本学専任教員との共同研究について相談窓口を一本化し相談体制を整えることである。

2. 令和元年度の事業実績について

令和元年度の実績はなかった。

3. 今後の課題

石川県内の自治体、関係機関等のニーズをよりきめ細かく把握するとともに、本学教員の研究テーマとのマッチングを行い、地域の課題解決に向けた取り組みができるように具体的な方策を打ち出していきたいと考えている。



3 国際貢献事業

3-1 JICA日系研修

「高齢者福祉におけるケアシステムと人材育成」コース

担当：中道 淳子 / 老年看護学 准教授
武山 雅志 / 心理学 教授

この研修事業は独立行政法人国際協力機構（JICA）の委託を受け、石川県立看護大学と羽咋市社会福祉協議会が実施運営する。中南米日系社会支援の一環として平成19年度から開始され、令和元年度は13期目の研修生を受け入れた。11期目からはボランティアを担う者ではなく、日本人会の幹部層を対象として実施している。

1. 研修目的

高齢者福祉制度や日本の伝統的な文化、ケアシステム、介護について講義で学びつつ、地域の施設、デイサービスなど多様な機関を視察し、高齢者福祉対策の組織的な対応を行うための仕組みや機能の重要性について幹部層の（知識と）意識の向上を促進する。

2. 研修実施体制

- (1) 研修期間：令和元年7月1日（月）～7月12日（月）
- (2) 研修員数：2名 パラグアイ共和国 伊藤 清志氏（イグアス日本人会 福祉理事）
パラグアイ共和国 林 美代子氏（ラ・コルメナ日本文化協会婦人部 部長）
- (3) 研修場所：石川県立看護大学、羽咋市社会福祉協議会
- (4) 講師：川島和代 塚田久恵 中道淳子 磯光江 渡辺達也（石川県立看護大学）
岩城和男 松田隆司 柳沢昌代 宮下陽江 中元美幸（羽咋市社会福祉協議会）

3. 研修内容（スケジュール参照）

短期間の研修であることから、高齢社会、高齢者福祉、ケアシステムをキーワードとした関連施設の視察と講義を取り入れたプログラムとし、高齢者福祉制度や日本の文化、ケアシステムなどを講義で学びつつ、地域の施設、デイサービスなど多様な機関を視察し、その実際について学ぶ。

	曜日	概要	
7月1日	月	9:00学長表敬訪問(JICA) オリエンテーション/カントリーレポート打ち合わせ(大学)	カントリーレポート練習 15:00 羽咋市表敬訪問(JICA)
7月2日	火	9:30【開講式】記念撮影 10:40【カントリーレポート】学生聴講(2年生) 12:00【歓迎会】	13:30【講義1】JICA日系研修概要説明(中道) 14:40【講義2】日本における高齢者医療保健福祉制度(磯)
7月3日	水	9:00【講義3】高齢者の特徴(川島) 10:40【講義4】介護予防(塚田)	13:30【説明・見学1】リハビリわたぼうし 小規模多機能ケアホーム わたぼうし
7月4日	木	9:00【説明】羽咋市社会福祉協議会・羽咋市の高齢者福祉の概要(松田) 10:30【説明】羽咋市在宅総合サービスステーション(柳沢)	14:00【説明・見学2】特別養護老人ホーム眉丈園
7月5日	金	9:30【説明・見学3】JAはくい 小規模多機能たんぼぼ	14:00【説明・見学4】JAはくい羽咋市デイサービス
7月6日	土	自主研修	
7月7日	日	資料整理(レポート作成)	
7月8日	月	10:00【説明・見学5】地域サロン・羽咋はつらつ教室 福水町	14:00【ディスカッション1】
7月9日	火	10:00【説明・見学6】高齢者筋カトレニング見学	13:30【ディスカッション2】
7月10日	水	9:00-【ディスカッション3】	13:30【ディスカッション4】
7月11日	木	【まとめのディスカッション】	【まとめのディスカッション】(羽咋・大学・JICA)
7月12日	金	【まとめのディスカッション】	13:00【成果発表】 14:00【閉講式】記念撮影 14:30【送別会】

4. 研修目標・評価指標

(1) 研修目標

高齢者福祉制度や日本の伝統的な文化、ケアシステム、介護について講義で学びつつ、地域の病院や施設、デイサービスなど多様な機関を視察し、高齢者福祉対策の組織的な対応を行うための仕組みや機能の重要性について幹部層の（知識と）意識の向上を促進する。

(2) 指標

帰国後、日系社会で高齢者福祉のシステムや人材育成に関して、個人的なスキルアップのみならず、組織的に今後ことについて取り組んでいくための具体的な活動を計画できる。

5. 達成度

研修員は、研修最終日の成果報告において、帰国後の活動について各自がそれぞれの移住地で取り組む内容について発表することができた。

林研修員は、バリアフリー環境としてトイレの手すりをつけること、ボランティアを増やすことに関して、婦人部の協力を徐々に増やしていくこと、研修先の羽咋市の福水町と交流していくという3つのプランであった。

伊藤研修員は、車いすのまま乗車できる送迎車をつくることや、在宅で療養している方やその家族が望む支援についてのニーズ調査、健康寿命についての関心を高めてもらうために羽咋の元気な高齢者の紹介をイグアス移住地コーヒーデーで実施するという3つのプランであった。

両者は、それぞれの移住地における福祉の現状をよく理解しており、実現可能性の高いプランを立てることが出来た。帰国後は、研修報告をはじめとし、各移住地でプランの実現にむけて取り組んで行くことが期待できる。

6. 次年度への提案、改善点

今年度は、一人は移住地の福祉担当をしている男性幹部に参加していただくことができた。もう一人も女性ではあったが、福祉活動だけでなく、婦人部の部長をされており、研修に関し高い関心をもっていた。そのため、研修で学びたいこともかなりはっきりしており、アクションプランもしっかり立てられた。具体的なアクションプランであったことから、発表後に、更に良いアイデアや提案が生まれた。アクションプラン発表直後に閉講式が行われるため、アクションプラン発表の場で生まれた新提案や更なる工夫点に関して、帰国後に具体的に取り入れられるように準備する時間を確保できなかった。来年度はそのような事態が生じるかどうかはわからないが、アクションプラン発表後にもその時の質疑応答内容を振り返る時間がとれると更によい。

7. その他

研修員には、看護大学の2年生の講義時間、地域の高齢者の集まりの場において、パラグアイ国や日系移住地の暮らしなどをご紹介いただいた。大学では毎年違う学生が聴講するが、羽咋市の地域の高齢者はここ2・3年続けてパラグアイの話聞いたことによって、「より親近感が増してきた」という感想も聞かれた。今後、一歩進んだ交流も期待できるのではないかと考える。

研修の光景（スナップ写真）

写真1 開講式における研修生の挨拶



写真2 カントリーレポート発表後、学生と記念撮影



写真3 成果報告会



写真4 閉講式後、関係者と記念撮影



3-2 JICA 青年研修

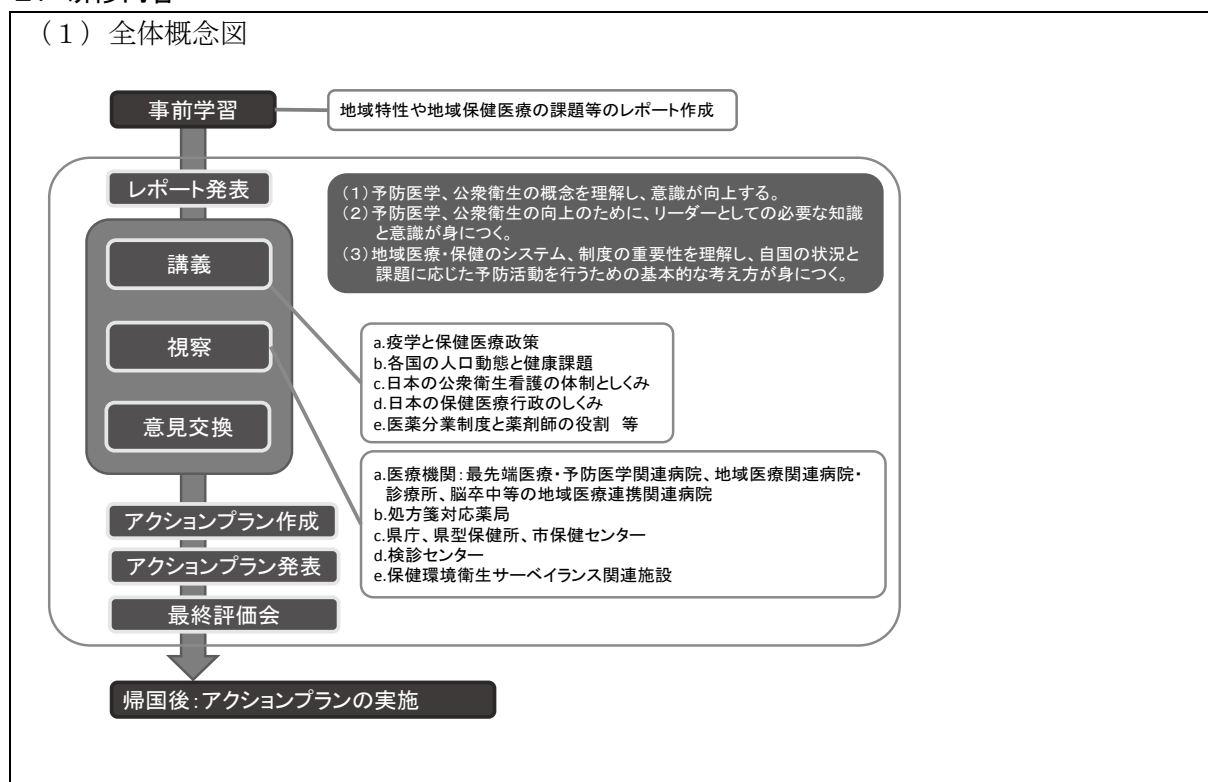
「地域保健医療実施管理」コース

担当：阿部 智恵子 / 地域看護学 准教授
武山 雅志 / 心理学 教授

1. 概要

(1) 案件名 和文 英文	2019年度カンボジア青年研修／地域保健医療実施管理コース Knowledge Co-Creation Program (Young Leaders) 2019 Cambodia/Community-based Health Operation and Management Course
(2) 研修期間	2019年12月5日～2019年12月17日
(3) 研修員	11名の地域保健医療に携わる医療従事者 (医師2名、助産師3名、看護師5名、薬剤師1名)
(4) 研修目標	(1) 予防医学、公衆衛生の概念を理解し、意識が向上する。 (2) 予防医学、公衆衛生の向上のために、リーダーとしての必要な知識と意識が身につく。 (3) 地域医療・保健のシステム、制度の重要性を理解し、自国の状況と課題に応じた予防活動を行うための基本的な考え方が身につく。

2. 研修内容



(2) 日程表 (別紙資料)

(3) シラバス (別紙資料)

(4) 研修テキスト (別途資料)

3. 主要研修科目毎のカリキュラム構成

主要研修項目	研修方法	研修内容	時間数	講師氏名(所属) (*は石川県立看護大学)
疫学と保健医療政策	講義 討議	<ul style="list-style-type: none"> 健康政策、保健事業における疫学研究の役割 科学的根拠に基づいた保健医療政策および保健事業実施 疫学的研究デザインの意義 健康政策のサイクル 地域保健活動にて求められる能力 	3	竹田昌代*
石川県立看護大学における人材育成	講義 討議	<ul style="list-style-type: none"> 看護学部の教育 大学院前期課程における教育 地域ケア総合センターにおける人材育成 看護キャリア支援センターにおける人材育成 	1.5	武山雅志*
日本の公衆衛生看護の体制としくみ	講義 討議	<ul style="list-style-type: none"> 日本の公衆衛生の基本的柱と概念 公衆衛生行政のしくみや体制 研修員の国における予防施策や課題 公衆衛生看護を担う保健師活動 	1.5	塚田久恵* 金子紀子*
医薬分業制度と薬剤師の役割	講義 討議	<ul style="list-style-type: none"> 日本における薬局の歴史と医薬分業制度 薬剤師教育と調剤の流れ 薬剤師業務 薬剤師の選択権と責任 	1.5	長谷川昇*
	講義 視察	<ul style="list-style-type: none"> 国民医療費・介護費の増加と制度の危機 かかりつけ薬局 かかりつけ薬局の役割と機能 	2	若林敏治 宮口達司 (コメヤ薬局吉野谷)
日本の保健医療行政の仕組み及び保険制度について	講義 討議	<ul style="list-style-type: none"> 日本の保健医療行政のしくみ (衛生行政の体系、生活習慣病対策、がん対策、感染症対策、その他医療保険制度) 医療保険制度 (国民皆保険制度の意義と特徴、医療保険制度の体系、保険診療の医療提供体制、医療費の一部負担金) 	2	菊地修一 大居勝宏 (石川県庁)
地域医療の実際	講義 視察	最先端医療・予防医学(三次医療)の実際 <ul style="list-style-type: none"> 病院概況説明 総合診療センターの紹介 産科婦人科の紹介 再生医療センター見学 	2	中村光宏 中橋毅 高田笑 石垣靖人 (金沢医科大学病院)
地域医療の実際 公衆衛生活動の実際	講義 視察	二次医療及び地域医療連携(循環器・虚血性心疾患等)の実際 <ul style="list-style-type: none"> 公立松任石川中央病院の見学及び医療廃棄物処理施設の見学と説明 講義:人々の命・生活・環境を守る地域医療—中核病院としての党員の役割— 予防医学について 治療医学について 	3	谷卓 (公立松任石川中央病院)

	講義 視察	一次医療の実際 ・公立つるぎ病院吉野谷診療所の見学 ・白山ろくの医療、介護・福祉環境(医療保険、 介護保険制度) ・吉野谷診療所の取り組み	2	橋本宏樹 (公立つるぎ病院吉 野谷診療所)
	講義 視察	へき地医療(ドクターヘリ)の実際 ・石川県立中央病院の見学 ・石川県ドクターヘリの導入と出動実績	1	明星康裕 (石川県立中央病院)
	講義 視察	保健所の役割と業務 ・南加賀保健福祉センター管内の概況説明 ・南加賀保健福祉センターの組織 ・南加賀保健福祉センターの役割と業務 ・感染症対策と結核対策	2.5	北西陽一 湯谷幹恵 竹本玲湖 (石川県南加賀保健福 祉センター)
公衆衛生活動の実際	講義 視察	市町保健センターの役割と業務 ・1歳6か月児健診の実際 ・市町保健センターの役割、内灘町の母子保 健事業について	3	上前久美子 (内灘町保健センター)
検診センターの役割 と業務	講義 視察 体験	主に2次予防を担う検診センターの役割と機能 ・健診センターの役割と機能 ・生活習慣病等の検査体験 ・人間ドッグ、健康診断フロア等の見学	2	田畑正司 (石川県予防医学協会)
保健環境サーベイラ ンスの実際	講義 視察	石川県保健環境センターの見学 ・感染症発生動向調査について ・サーベイランス ・感染症サーベイランスの具体的な目的	2	谷村睦美 橋場久雄 (石川県保健環境センター)
ふりかえりとまとめ	講義 演習	・講義を振り返って(学んだこと・疑問点など) ・視察を振り返って(学んだこと・疑問点など) ・アクションプラン作成に、どう生かすか	2.5	阿部智恵子* 中道淳子* 竹田昌代*
アクションプラン準備	講義 演習	アクションプラン作成と発表準備 ・どのように伝えるか ・具体的な案を考える(媒体も含む)	6	阿部智恵子* 中道淳子* 竹田昌代*
アクションプラン発表 会	発表	アクションプラン発表 ・班別発表 ・質疑応答	2	担当講師・教員* JICA
評価会	討議	研修の評価 ・研修員の満足度・研修員の要望等 ・研修受け入れ側の感想、意見等	1	中道淳子*、阿部智 恵子*、竹田昌代*、 JICA



4. 研修案件に対する所見

(1) 研修企画内容

今回の研修の企画は、将来のリーダーとしての予防医学・公衆衛生分野における実施体制の課題解決を担う青年層の知識と意識の向上を目指す前年度のプログラムを継承する形で、予防、公衆衛生、地域医療、地域医療連携をキーワードとした関連施設の視察と講義を取り入れたプログラムであった。今年度も、カンボジアの現状から、HIVなど感染症による死亡が多いことや栄養不良や産後ケアの不十分さから妊産婦死亡や乳児死亡が多いことを課題と認識している研修生が多かった。

そのため、保健環境センターや研修先の産科病棟視察や日本の助産師（本学教員）・助産学生（大学院生）との交流会を持った。また、施設の視察においては、産科病棟の視察を組み入れて対応した。日本の助産における現状や日本の産科病棟を視察したことで学びが深まった。

今回は、へき地医療（ドクターヘリ）も研修内容に組み入れた。天候不順のため見学はできなかったが、出勤実績等の説明を行っていただき、HCU病棟の見学も行い、学びが深まった。

また、予防医学に関心の高い研修員が多いため、医療と連携した健康増進施設（メディカルウェルネスダイナミック Hakusan）の見学も取り入れた。日本の予防医学についてさらに関心が深まった。

また、毎年、「院内衛生環境改善」をアクションプランにあげる研修生がいるため、視察病院の見学に加えて、「医療廃棄物処理」施設の視察と見学を取り入れた。帰国後、「日本の医療廃棄物処理」を参考とし、母国の改善を目指したアクションプラン作成につながった。

アンケート結果から、単元目的の達成状況について、公衆衛生活動の実態、感染症、医薬分業制度と薬剤師の役割、疫学と日本保健医療政策、地域医療と地域医療連携、日本の保健医療行政体制の仕組みと医療保険制度が参考になったという意見があり、その理由としては、自国の公衆衛生の改善に共有できる、自国においては、保健医療において感染症予防が急務なので多くの知見を得られたと回答していた。

また、市町保健センターの健診や保健医療の役割業務は参考になったと回答していた。研修で扱われなかったが、含むべき科目として、地域の緊急医療体制、母子保健サービスを向上させる政策について、妊産婦のケア、リーダーシップ、病院や地域において、医師の業務や役割について研修員の職業と同分野の視察先が挙げられていた。今回、必要でなかった科目に、1名のみ最先端技術をあげていた研修生がいた。（大半の研修生が、必要ではなかった科目はなしと答える中で。）その理由は、「現在のカンボジアの地域保健医療の実施とかけ離れている」ということであった。あまりにもかけ離れている現状を見ることで、「この知識・経験は情報として受け入れるが、帰国後研修や指導、または経験共有という面で実践できない」とも述べている。この研修員の言葉から、我々、受け入れ側は、何を考えればよいのだろうか。研修員からすれば、最先端技術でなくても、「もう、少し、頑張ればできるかもしれない」という気持ちが持てるような施設であってもよかったかもしれない。例えば、カンボジアもだんだん高齢化になってくるため、地域での訪問看護ステーションや助産所のような地域に開かれた施設などの視察があった方がよかったかもしれないと考える。受け入れ側においても、今後も、研修先の決定等について、熟慮していく必要があると思われる。

研修プログラムは、研修員を公募する前に、講師・視察先から承諾を得、講義や視察時に使用する資料提出も終えている。研修員が決まってから、研修員に合わせて研修プログラムを組むことは、大変難しい現状がある。今後は、研修プログラムに合った研修員を迎えることができるように研修員公募時に、詳しい研修内容を提示していきたい。

研修員たちは、カンボジアの国の代表として、また個人の所属の代表として参加しているため、片方に偏ることなくバランスの取れた研修内容を今後取り入れていく必要があると考える。

全体的に時間的制約のある中で、短期間に目的を達成するための内容が豊富に盛り込まれたプログラムであった。今後さらに深く学ぶ機会になったのではないかと考える。研修員の満足度は高かったが、研修日程の中間でのディスカッション等の時間が持てれば、さらに、学びが深まったのではないかと考える。今後の検討課題としたい。

(2) 研修員の健康状態および研修態度等

はじめて、研究に来られた初日にも、全員が日本語で、笑顔で挨拶され、大変好印象を持った。若い研修生のおもてなしのこころを反対にこちらが、学ばせていただいた。今回の研修は、昨年より7日程度遅く始まった。研修期間中には、寒い日も多かったが、衣服の調節もうまくされており、風邪の罹患もなく、滞在時に医療機関にかかることはなかった。朝食については、大学や視察先の食堂、ショッピングモールのフードコートを利用した、事前に、メニューの情報収集や連絡を行っていたので、スムーズであった。研修態度について、講義・視察とも欠席者は見られなかった。講義中は、全員が常に熱心に質問され、学ぶ意欲の高さがうかがわれた。視察先でも、大変熱心に質疑応答が行われた。研修管理員の日本⇄カンボジア語通訳2名体制であったため、2グループにわかれて入れ替えて視察することで、同一施設内の複数のセッションの見学が可能になった。少人数グループとしたことで、効率よく説明を受け、より自国に合わせた活発な質問ができる時間の確保につながったと考える。全体の研修員の研修態度について、視察先の職員の皆様からは、研修員たちの積極的な学ぶ態度と礼儀正しさに、好感を得られていた。時間管理については、事前に日本は時間に厳しいことが伝わっていたため、集合時間に遅れることはなかった。

(3) シラバス・テキスト・参考資料

研修のシラバス・テキストはカンボジア語に翻訳され、研修員たちが研修内容を理解する上で役に立ったと言える。今年度も、研修初日に、すべての講義、視察に関する資料がセットされたファイルを渡すことができたため、予習にも役立ち、研修員に好評であった。市町村の母子保健センターの視察時に使用した母子健康手帳に関しては、英語版を人数分購入し提供した。

アクションプランの発表会は、研修員、JICA関係者、青年研修担当職員、本学の教員が参加した。質疑応答も活発に行われた。今年度は、①院内衛生環境改善グループ、②地域の健康増進グループ③母子保健グループの3班に編成されたチームでグループワークを行った。自分の関心のある分野でグループ分けを行ったため、話し合いも活発に行われた。ただ、グループでの意思疎通に、少し時間がかかったグループもあった。研修管理員が、お互いの思いを通訳することによって、意思疎通ができ、共通の課題の認識もでき、笑顔がみられた。研修員自身が、充分、話し合うことで、自国での活動にもつながる具体的なアクションプランの作成につながったと考えられる。

アクションプラン作成には、研修中の講義、施設見学等の理解が、不可欠であり、より具体的なアクションプランにつながるため、研修中のディスカッション等を通じて、研修担当者は、研修中の研修員の理解度に注目して、支援をしていくことが今後も重要であると認識した。

5. 次年度に向けた改善点および提案

・研修のプログラムを立ててから研修員を公募するシステムのため、研修の企画が対象者のニーズに全て応えることが難しい。また、研修員の概要がわかってからプログラムを変更することも時間的に難しい。困難面はあると思われるが、現地で募集を行うJICA担当者に、現状を十分に伝え、募集段階の対応をさらに工夫していただきたい。その国の代表者として、また、職業における代表として研修に来ていることを受け入れ側も理解して、研修内容が、満足度が高くなるように配慮を行っていきたい。研修員の概要がわかってから、研修員の構成によっては、研修内容の微調整を行う必要も視野に入れて置きたい。

・受け入れる側も、受け入れる国の現状、課題、文化等をよく事前に勉強し、理解し、視野を

広めたうえで、受け入れることは、研修員との良好なコミュニケーションをとる上でも必要と思われる。

・今回は、医療従事者の参加者がほとんどで、本プログラムの意図した目標を達成するための研修内容が看護職の活動に示唆を与える点でマッチしていた。今後も、公衆衛生や地域医療に携わる看護職を中心とした医療職のメンバー構成としていただきたい。

・今回のアンケート結果をもとに、講義内容や視察先の選定等をさらに、検討していくことが、研修員のよい学びへとつながっていくと思われる。今後においても、事前に、研修員の希望をよく知り、JICA 関係者との連携を密に取ることが重要と考えられた。

・視察先では、多くの質問をされていたが、大幅に時間超過することはなかった。積極的な学びの姿勢は、学内講師や視察先にも好印象を与えていた。そのことは、今後の視察受け入れにも、よい影響があるものと思われた。

・視察先スタッフや講師とのディスカッションについては、プログラムを精査し、ディスカッションの時間確保が可能か検討したい。

・研修期間については、1 か月余りの長期的な研修を望む研修員もいた。1日の施設視察の数を減らして、もっとじっくり視察先の職員とディスカッションを望んでいた研修生もあり、研修のあり方について、考えるきっかけとなった。受け入れ側の一方向的な方向ではなく、研修員との双方向性の研修を探ることにより、さらに、研修生の満足度を高めることができるのではないかと考える。

・今回の研修員も、日本の文化や日本人の生活について興味があることを開講式で話されていた。文化交流として本学の茶道サークルでのお茶会の体験は、大変喜ばれ、異文化体験となった。

また、カントリーレポート発表会・大学案内・送別会時に学部生と交流する機会を設け、喜ばれた。しかし、今年度も、日本の家庭での生活体験については企画できなかった。

・研修後半の視察においては、今年度は、視察先計画を考える際に、あらかじめ、視察場所の位置や交通について、スムーズにいきやすいルートを選んでいたので、時間管理もスムーズに安全に行えることができた。

今後も、研修員の疲労度を視野に入れつつ、施設先の距離や視察順序も考えた効率的な視察計画が重要と思われる。

・研修員と研修管理員との関係も良好で、長期にわたる研修も居心地の良いものになったと考えられた。



4 そ の 他

4-1 かほく市との包括的連携協定に関わる取り組み

武山 雅志 / 心理学 教授

1. 令和元年度の取り組みについて

平成 22 年 10 月に石川県立看護大学とかほく市が包括的連携協定を締結し、本格的な活動を開始して 8 年目を迎えた。

本年度はかほく市が幹事となり、2 回の協議会を開催した。

5 月 28 日（火）第 1 回協議会：平成 30 年度の事業実績報告と令和元年度事業案について

12 月 16 日（月）第 2 回協議会：令和元年度事業の進捗状況報告と令和 2 年度の計画立案について

かほく市から継続 11 事業、石川県立看護大学より継続 3 事業を提案し実施された。

	主催	事業	看護大担当
1	かほく市	かほく市ケーブルテレビ事業（企画情報課）	看大祭実行委員・垣花准教授
2		健康ブランド化事業（健康福祉課）	武山教授・川島教授
3		発達障害に関する相談事業（健康福祉課）	大江助教
4		いきいきシニア活動推進事業（長寿介護課）	金谷講師他
5		地域支援事業（長寿介護課）	川島教授・竹田特任講師
6		介護予防サポーター養成講座（長寿介護課）	（会議上での提案のみ）
7		家庭介護者教室（長寿介護課）	（会議上での提案のみ）
8		かほく市体カテスト（生涯学習課）	長谷川教授
9		問題を抱える子ども等の自立支援事業（学校教育課）	武山教授
10		教育相談事業（学校教育課）	武山教授
11		妊娠期から切れ目のない育児支援事業（子育て支援課）	西村教授
12	看護大	高齢者と看護学生との交流事業	曾根講師
13		子育て支援学生ボランティア活動	千原助教
14		災害につよい街づくり	武山教授

令和元年度は 14 事業すべてが継続事業ということで円滑な事業展開がなされた。

その中でも健康ブランド化事業の中のかほく市の食材を用いた健康弁当づくりは、令和元年度 6 月の農林水産省第 3 回食育活動（ボランティア部門・大学等の部）において消費・安全局長賞を受賞した。垣花准教授と学生たちの熱意のある取組が評価された。

2. 令和 2 年度に向けての事業実施についての検討

令和元年度はすべてが継続事業ということで円滑な事業展開が図られたのは喜ばしい限りではあるが、ともすると新鮮味のないものにならないよう内容の充実や新しい視点を取り入れたものにしていく必要があると考える。

令和元年度秋から始まった「いきいきステーション」を活用した地域公開講座は、名称も「いきいき世代とつくる健康教室」と変更し、より住民の皆様親しみのある内容になるようにしていきたいと考えている。

石川県立看護大学の若手教員にも、かほく市のご協力を得て地域の皆様の声を聞きながら、研究フィールドを広げていくきっかけになるような取組ができることを期待している。

石川県立看護大学附属地域ケア総合センター

事業報告書（第17巻）

令和2年8月発行

発行：石川県立看護大学附属地域ケア総合センター

〒929-1210

石川県かほく市学園台1丁目1番地

Tel.076-281-8308 Fax.076-281-8309

© 2015 Ishikawa Prefectural Nursing University.
All rights reserved.

著作権は石川県公立大学法人に帰属する。

